様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：２４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０７５９

研究課題名（和文）１９世紀英領植民地世界における「家族の標準化」とその限界

研究課題名（英文）Standardisation of the family in the British Colonial Societies in the ninteenth century

研究代表者
中沢　葉子（並河葉子）（NAMIKAWA, Yoko）

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：１０２９５７４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：　1780年代から1830年代にかけて反奴隷制運動が進行する中で西インドの英領植民地で、奴隷や元奴隷たちの家族に求められていた家族観やその変化とその意味を検証した。
　検証した時期を通じて奴隷制プランテーションが地域経済の核となっていた西インド世界にでは、労働力としての黒人奴隷人口の維持に関心が高まり、女性の奴隷たちの出産能力を最大化するための様ざまな努力が行われた。さらに、子どもの奴隷たちの成育環境にも大きな関心が払われるようになった。結果的に出産数は増加しなかったが、それを促すために奴隷たちに普遍的とされた（非国教会も含めた）キリスト教的なモラルや家族規範の普及がはかられた。

研究成果の概要（英文）：The transformation and its meaning of the ideal of family was anilised. The concept of family in the British slave societies during the age of antislavery movement were focused.
After the American Revolution, the Atlantic Slave trade became unstable, so planters in slave societies tried to exploit fertility as much as possible to maintain workforce. They improved the childcare environment, gave reward to female slaves who given birth, but the number of the children did not increase. Planters and the Colonial officials also tried to propagate Christianity and Christian ideal of family there as part of the amelioration of slavery. Although their trial to increase fertility failed. These attempts, however, suggest that Britain transformed from the English nation to the British Empire that incorporate non Anglican-people including outside Britain, and the process of antislavery or amelioration of slavery symbolised the attempt to establish universal humanitarian moral code.

研究分野：西洋近代史

キーワード：反奴隷制運動　家族　西インド社会　女性

１．研究開始当初の背景

イギリスにおける反奴隷制運動では、アメリカ独立革命およびフランス革命で焦点となった「自由」や「人権」の概念が大きな影響を与えたことや、19 世紀にイギリスが「人道主義の帝国」として帝国を再編していく原動力となったことを指摘する研究が多く出ている〔文献１〕。申請者は 18 世紀末から 19 世紀半ばまでのイギリスを中心とする反奴隷制運動の中でクローズアップされた「自由」の適用範囲についての言説を検証し、近代的価値規範とされる「自由」や「人権」概念の付与範囲が巧妙に限定されていたこと、結果として、そこから排除されたた女性や非白人たちに対しては「保護」や「人道主義」が前面に出されるようになったこと、また、白人と非白人の境界線に関心が寄せられるようになり、同時に「人種主義的」な感情が醸成されたことを明らかにしてきた。さらに反奴隷制運動において女性たちが理想とする「家族観」を軸に、男性とは異なる視点から制度への反対を展開したこと、彼女たちの思想はその後のキリスト教ミッションに引き継がれ、そのジェンダー観が非ヨーロッパ世界へも広がるプロセスを検証してきた〔文献２〕。

奴隷制廃止後の英領植民地世界については、近年研究が進みつつあるが、元奴隷たちが構築していった「家族」の姿を具体的に分析した研究は少ない。

また、近年の啓蒙主義研究や反奴隷制運動研究の成果を踏まえて、18 世紀半ば以後、「自由」や「人権」概念が欧米世界で共有されることになった事実と、「人種主義」や近代的な「ジェンダー観」が成立し、普及していく過程についてはそれぞれ明らかにされているが、両者の関連を具体的に検証する研究はまだ少ない。

こうしたことをふまえて、上記の研究蓄積が少ない点について明らかにしようと研究を開始した。

〔文献１〕Brown, Christopher L., *Moral Capital*:*Foundation of British Abolitionism*, University of North Carolina Press, 2006. 〔文献２〕Peterson,D.R., *Abolition and Imperialism in Britain, Africa and the Atlantic*, Ohio University Press, 2010、藤川隆男、並河葉子他著、『白人とは何か』、刀水書房、2005 年。〔文献３〕Scully, Pamela, Paton Diana(eds.), *Gender and Slave Emancipation in the Atlantic World*, Duke University Press, 2005; Emily Maktelow, *Missionary Families: Race, Gender and Generation on the Spiritual Frontier*, Manchester University Press, 2013.

２．研究の目的

（１）この時期は、宣教師によって普遍的とされた近代的価値規範や家族観が非ヨーロッパに広く移植されようとされる時期と重なる。本研究は、イギリス人女性宣教師たちが、混血など各地で規範とされる「家族像」から逸脱したマージナルな存在を支えながら、「家族の標準化」を推進しようとした 19 世紀半ばから後半、近代的価値規範の生成と表裏一体となった人種観が成立する時代に、英領の旧奴隷制社会および、非ヨーロッパ世界にキリスト教ミッションの女性たちが、標準型と考えた「家族」を移植するための多様な戦略を検証し、家族が持つべき機能、子どもたちや母親あるいは妻としての女性たちに期待された役割から、普遍的なはずの「自由」の限界と「保護」の複雑な関係を明らかにしようと考えた。

（２）理想とされた「家族像」から、普遍的かつ近代的とされた「家族」の在り方、機能を明らかにすることが目的の一つである。さらに「家族」は一方的に与えられるものではなく、各時代、各社会にそれぞれの型があった。イギリス、植民地それぞれに「標準的な家族」の形を作ることもあれば、理想型からは逸脱したとみなされる「家族」を作ることもまたあった。理想型を受け取る立場とされた人びとの「家族戦略」から、標準型家族の限界や多様性を描出することが狙いである。また、アジア地域でミッションが運営した学校は、社会のエリート層子女の教育に特化している場合がある。世界各地で「家族」の標準化推進のためにとられた手法を統合的にとらえ、標準型「家族」の矛盾や複層性、変容をとらえることも目的としている。

３．研究の方法

本研究では、混血など、社会のマージナルな存在に対する処遇に注目し、この家族規範に反映されている近代的な人種観や価値規範の限界や矛盾を明らかにしながら、

近代的あるいは普遍的とされている家族像の批判的な検証をとおして、「近代性」のもつ矛盾および表裏一体の関係にある諸概念の再検討を試みた。

具体的な手法としては、基本的に当時、イギリスやアメリカで反奴隷制運動にかかわった人びと、西インド社会の奴隷制プランテーションの改善を試みた人びとの著作、議会文書の分析を中心である。

４．研究成果

（1）本申請研究の開始当初は 19 世紀後半に注目しようと考えていたが、それに至る 18 世紀末から 19 世紀半ばにかけての反奴隷制運動の中で奴隷たちの家族についての議論がたびたび議会でも取り上げられていたことが分かったため、まず、この時期のイギリス領植民地、とりわけ西インド社会の奴隷制社会と奴隷制廃止直後の家族の変化に注目し、反奴隷制運動が展開する中でどのような道徳規範が形成されていったのかを検証した。

当初、家族を持たないものとされていた奴隷たちに「家族」を形成させる、あるいは、どのような家族を持たせるか、またその目的は何かについて、アメリカ独立を契機に様ざまな議論が交わされるようになったことが分かった。イギリス領の西インド社会ではアメリカ独立とその後にイギリス社会で本格化した奴隷貿易廃止運動の影響を受けて、労働力としての奴隷人口の維持が大きな課題として意識されるようになったことが大きい。

プランターたちは、この時期から奴隷の処遇改善を目指してさまざまなマニュアルを作成し、奴隷の生活・労働環境の改善、とりわけ女性の奴隷たちへの配慮を示しながら、奴隷たちの出生率の向上を試みていた。

当時、イギリス領西インドの奴隷たちにはフランス領西インドの場合と異なり、法的な結婚が許されていなかったが、キリスト教布教を積極的に推進ことや奴隷たちの結婚を認めてキリスト教的な家族規範を彼らの間に浸透させることで、出生数を増加させることができるのではないかとの議論が出始めた。

結局、奴隷制廃止の直前までイングランド国教会による奴隷の結婚はほとんど見られなかった。ただし、西インド社会で活発にミッションを行っていた非国教会系の宣教師たちが認めた結婚はしだいに増加したことがわかっている。

しかしながら、奴隷に結婚が認められても、あるいは、出産する女性の奴隷たちに数々の報償を用意したり、労働を軽減するなどの対策を講じても奴隷の子どもの数は一向に増えなかった。これについては、アメリカ合衆国南部の奴隷制プランテーションとの大きな違いとなっており、その原因については、今後の更なる研究が必要である。

（2）本研究からは、反奴隷制運動や奴隷制改善運動がイギリスという国家の在り方に及ぼした影響についても明らかになった。

奴隷制改善に対する試みの多くが失敗に帰したとはいえ、そうした一連の試みから、当時のイギリス社会がイングランド国教会の外側にいた非国教徒やブリテン島の外側にいた人びとを次第に社会に統合していこうとしていた姿勢である。イギリスは、イングランド国教会の内側にいるイングランド人の国であることを止め、イギリス帝国へと舵を切ったこと、それに付随してイングランド国教会の枠を超えた、新しい普遍的なキリスト教モラルを構築しようと模索していたことが伺われる。

半世紀にわたって続いた半奴隷制運動のなかで試みられた種々のリフォームとは、世界帝国へと脱皮しつつあったイギリスが、新しい価値規範、モラルを社会において具現化しようとした試みであるということができる。こうしたイギリスにおける反奴隷制運動が持った意味については、口頭報告の形で成果を発表した以外に、一般向けの書物の中でも紹介した。

（3）家族の規範は、新しい社会のモラルの基盤となるものとして、ミッションによりその後も西インドだけではなく世界の他の地域に広く普及が図られていくものとなった（成果３）。同時に、こうした反奴隷制運動の中では、当初目的を共有し、ともに活動していた女性や労働者などのグループがその後活動の主流から離れて独自の方向を追求していくことになり、結局、19 世紀後半、それまでの活動を引き継いだグループによりイギリス帝国の価値規範として強く前面に出て行くのは、18 世紀後半からの反奴隷制運動で中核的な活動を行う中でグループとして形が明確になっていったミドルクラスのそれであったといえよう。

さらに、イギリス領西インド社会における奴隷たちの家族の姿を相対化するために、イギリスの他の地域における家族の姿やフェミニズム思想の流れなどについて、国内外の研究者とともに検討するセミナーを開催した。

ウィンチェスタ大学のジョイス・グッドマン教授を迎えて本科研が共催したシンポジウム「イギリスにおける教育史研究の潮流ージェン

ダー・トランスナショナリズム、エージェンシー女性のトランスナショナリズム」においては、女性宣教師たちが非ヨーロッパ世界、とりわけ日本で果たした役割についてコメンテーターとして述べた。

エセックス大学教授のパメラ・コックス氏とは、問題を抱え、チャイルド・リムーバルを経験した子どもたちのその後について日本の場合との対比しながら、家族の機能について議論した。このセミナーを発展させる形で、同年 12 月にはイギリス助成し研究会において「チャイルド・リムーバルの多様なかたち」と題するシンポジウムを主催し、日本語にすることが非常に難しいながら、近代イギリスにおいて頻繁に見られた「チャイルド・リムーバル」、つまり、実親から子どもを引き離す事例について、歴史学、文学双方から検討を加え、イギリス社会における「家族」の持つ意味を議論した。

また、2017 年 10 月にはケンブリッジ大学のルーシー・デラップ教授と鳥山純子氏を迎えての「近代フェミニズムを再考する」では非ヨーロッパ世界における多様なフェミニズムのかたちについて議論し、ブロンウェン・ウォルター名誉教授と浜井祐三子氏の「アイリッシュ・ディアスポラ」においてアイルランド人ワーキングクラスの女性移民にとっての近代について意見交換を行うなかで、これまでの女性史研究、フェミニズム研究の中では取り上げれられることのなかった、白人ミドルクラス以外の女性たちにとってのフェミニズムや近代的家族規範が持つ意味などについて検討した。

一連のセミナーの成果の一部は、『子ども学大事典』の諸項目の翻訳の中にも生かされている（当該事典の翻訳・刊行においては編集委員としてもかかわった）。

４．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１　件）

①並河葉子、「イギリス領西インド植民地における「奴隷制改善」と奴隷の「結婚」問題、『史林』第 99 巻 1 号（特集号「家族」）（2016 年 1 月）、146-176 頁、査読有。

〔学会発表〕（計　4　件）

①並河葉子、「チャイルド・リムーバルの多様なかたち：奴隷の子どもたちを考える意味」、イギリス女性史研究会・第 29 回研究会シンポジウム「近代イギリスにおける子どもと女性―child removal の多角的検討からみる子ども観―」オーガナイザー、はじめに　並河葉子（神戸市外国語大学）：2017 年 12 月 9 日甲南大学　東京ネットワークキャンパス。

②並河葉子、「女性宣教師研究の立場からコメント」、シンポジウム：イギリスにおける教育史研究の潮流ージェンダー・トランスナショナリズム、エージェンシー、2016 年 2 月 20 日（土）、京都大学。

③並河葉子、「イギリスにおける反奴隷制運動の意味と意義―奴隷制改善の試みの検証から―」ワークショップ西洋史・大阪、2016 年 5 月 28 日、

④並河葉子、「イギリス領西インド植民地における奴隷の女性と子どもたち」、世界子ども学研究会　第 16 回研究例会、青山学院大学、2016 年 3 月 29 日。

〔図書〕（計　4　件）

①並河葉子、村知稔三他編著『子ども観のグローバル・ヒストリー』、原書房、「反奴隷制期の奴隷の子どもたちと母親」、61－78 頁、2018 年 3 月。

②並河葉子、指昭博編著『キリスト教会の社会史―時代と地域による変容―』、彩流社、2017 年 9 月、「インドにおけるミッション活動」、191－216 頁。

③並河葉子、川成洋（編著）『イギリスの歴史を知るための 50 章』、明石書店、142－147 頁、　2016 年 12 月。

④北本正章、並河葉子他編訳、ポーラ・ファス『世界子ども学大事典』、原書房、2016 年 11 月。

〔その他〕　（計 2 件）

①並河葉子　「女子教育史研究の可能性－ミッション史の立場から－」、『女性とジェンダーの歴史』第 4 号、2017 年、38－40 頁、査読有。

②〔書評〕Midori Ymaguchi, *Daughters of the Anglican Clergy*　(Palgrave Macmillan)　『ヴィクトリア朝文化研究』13 号、2015 年 11 月、179－182 頁。

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
主催、共催セミナー（計４件）
①主催セミナー：'Rethinking feminism through global history', オーガナイザー　並河葉子、スピーカーLucy Delap(University of Cambridge), コメンテーター　鳥山純子（桜美林大学)、2017 年 10 月 28 日、同志社大学烏丸キャンパス。
②共催セミナー「アイリッシュ・ディアスポラの中の女性」、'Placing Women in the Irish Diaspora', スピーカー、Bronwen Walter (Anglia Ruskin University),共同オーガナイザー　並河葉子、　コメンテーター　浜井祐三子（北海道大学)、2017 年 11 月 5 日、名古屋市立大学滝子キャンパス。
③主催セミナー：'The origins and impact of 'child removal' in Britain and beyond: a life course approach', オーガナイザー　並河葉子、スピーカー　Prof. Pamela Cox (University of Essex), コメンテーター　奥田伸子（名古屋市立大学)、2017 年 4 月 15 日、同志社大学烏丸キャンパス
④主催シンポジウム：イギリスにおける教育史研究の潮流ージェンダー・トランスナショナリズム、エージェンシー、基調講演　Professor Joyce Goodman (University of Winchester)、オーガナイザー、コメンテーター　並河葉子、2016 年 2 月 20 日（土）13 時 30 分～17 時 30 分、京都大学。

６．研究組織
(1)研究代表者
中沢　葉子　（並河葉子　NAMIKAWA, Yoko)、神戸市外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号：10295743